

《湖の女》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第17号（2000年10月発行）の拙稿『ロッシニー全作品事典（12）《湖の女》』。その増補改訂版を日本ロッシニー協会ホームページに掲載します。

（2013年5月改訂／2015年12月再改訂）

I-29 湖の女 *La donna del lago*

註：直訳は「湖の女」。スコット原作の訳題「湖上の美人」が英文学書や事典に定着し、オペラ文献でも踏襲されてきた（明治期の訳題は「湖上之美人」、昭和11年初版の岩波文庫は「湖の麗人」）。本稿ではロッシニー作品を《湖の女》、スコット原作を『湖上の美人』と表記する。

劇区分 2幕のメロドラマ（Melo-dramma in due atti） 註：Melo-dramma の分綴りは初版台本に準拠。

台本 アンドレーア・レオーネ・トットラ（Andrea Leone Tottola, ? [1770 以前-1831]）
（第1幕全10景、第2幕全7景、イタリア語）

原作 ウォルター・スコット（Walter Scott, 1771-1832）の6篇からなる物語詩『湖上の美人 [湖の女]（*The Lady of the Lake*）』（1810年5月エディンバラ刊）

作曲年 1819年8月～10月上旬（推定）

初演 1819年10月24日¹（日曜日）、ナポリ、サン・カルロ劇場（Teatro San Carlo） 註：初版台本の記載は Real Teatro S. Carlo

- 人物**
- ① ジャコモ 5 世 Giacomo V（テノール、c'-d''）……スコットランド王。騎士ウベルト・ディ・スノウドン（Cavaliere Uberto di Snowdon）と名乗る
 - ② ドウグラス・ダングス Douglas D'Angus（バス、E♭-f）……エーレナの父
註：台本では原作どおり Douglas [ダグラス] と表記されたが自筆楽譜の表記は Douglas（全集版もロッシニーの表記に準拠）。現代の上演で役名を Douglas と表記する場合も通例「ドウグラス」と発音されるが、「ダグラス」と発音する事例もある。
 - ③ ロドリゴ・ディ・ドゥ Rodrigo di Dhu（テノール、a♭-c''）……反乱軍の首領
 - ④ エーレナ Elena（ソプラノ、a♭-b''）……ドウグラスの娘
 - ⑤ マルコム・グレアム Malcom Groeme（コントラルト、f♯-b''）……エーレナを愛する反乱軍の騎士
註：台本では原作どおり Malcolm と表記されたが、自筆楽譜の表記は Malcom（全集版もロッシニーの表記に準拠）。
 - ⑥ アルビーナ Albina（メゾソプラノ、b♭-a''）
 - ⑦ セラーノ Serano（テノール、d'-g''）
 - ⑧ ベルトラム Bertram（テノール、f'-g''） 註：1820年ナポリ版の再高音は a♭''。
他に羊飼いの男女、吟遊詩人、貴人と貴婦人、高地人 [クラン・アルピーノ] の戦士、狩人、王の衛兵たち

- 初演者**
- ① ジョヴァンニ・ダヴィド（Giovanni David, 1790-1864）
 - ② ミケーレ・ベネデッティ（Michele Benedetti, 1778-?） 註：初版台本は Nicola Benedetti と表記。
 - ③ アンドレア・ノッツァーリ（Andrea Nozzari, 1775-1832）
 - ④ イザベッラ・コルブラン（Isabella Colbran, 1784-1845）
 - ⑤ ロズムンダ・ピザローニ（Rosmunda Pisaroni, 1793-1872） 註：初版台本は Rosmunda Pesaroni と表記。
 - ⑥ マリーア・マンツイ（Maria Manzi, ?-?）
 - ⑦ ガエターノ・キッツオーラ（Gaetano Chizzola, ?-?）
 - ⑧ マッシモ・オルランディーニ（Massimo Orlandini, ?-?）

管弦楽 2フルート／2ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン*、2トランペット、3トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハーブ、舞台上の6ホルン、舞台上のバンダとトランペット群、弦楽合奏

* ロッシニーは2ホルンで作曲し、不詳の協力者の作曲したN.4のみ4ホルンを使用。

演奏時間 第1幕：約90分 第2幕：約60分

自筆楽譜 ロッシニー財団、ペーザロ

全曲初版 Carli,Paris,1822-23. (ピアノ伴奏譜初版)
Lafillé,Paris,1825. (総譜初版 [フランス語改作版])
全集版 I/29 (H. Colin Slim 校訂,Fondazione Rossini Pesaro,1990.)

楽曲構成 (全集版に基づく)

第1幕

- N.1 序曲 (Sinfonia) *と導入曲〈暁の使者は Del di la messaggiera〉 (エーレナ、ウベルト、合唱)
* 序曲は独立したのではなく、導入曲の冒頭合唱と一体になっている。
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈今日なのですか? E in questo dì?〉 (エーレナ、アルビーナ、ウベルト、セラール、合唱)
- N.2 合唱〈イニバカの乙女は D'Inibaca,donzella〉、エーレナとウベルトの二重唱〈私の惨めな人生に Le mie barbare vicende〉 (エーレナ、ウベルト、合唱)
- N.3 レチタティーヴォ〈幸せな壁よ Mura felici〉とマルコムのカヴァティーナ〈エーレナ! 君を呼ぶ! Elena! oh tu,che chiamo!〉 (マルコム)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ちょうど良いときに、お着きになりました Signor, giungi opportuno〉 (エーレナ、マルコム、セラール、ドゥグラス)
- N.4 ドゥグラスのアリア〈黙るのだ Taci, lo voglio〉 (ドゥグラス)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈宿命の狭間で E nel fatal conflitto〉 (エーレナ、マルコム)
- N.5 エーレナとマルコムの小二重唱〈私は生きていられません Vivere io non potrò〉 (エーレナ、マルコム)
- N.6 合唱〈急流となって Qual rapido torrente〉とロドリゴのカヴァティーナ〈我はお前たちと共に、我が勇者たちよ Eccomi a voi, miei prodi〉 (ロドリゴ、合唱)
— ソルティータの後のレチタティーヴォ〈ついに私に与えられた Alfin mi è dato, o Prence〉 (ロドリゴ、ドゥグラス)
註: 「カヴァティーナの後の」ではなく「ソルティータの後の」と記されている。
- N.7 合唱〈星よ、来れ Vieni,o stella〉と第1幕フィナーレ〈愛する人との一瞬がどんなに Quanto a quest'alma amante〉 (エーレナ、アルビーナ、マルコム、ロドリゴ、セラール、ドゥグラス、合唱)

第2幕

- N.8 ウベルトのカヴァティーナ〈おお、甘き炎よ Oh fiamma soave〉 (ウベルト)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈そうです、あなたのために、愛する人よ Si,per te,mio tesoro〉 (エーレナ、ウベルト、セラール)
- N.9 三重唱〈どうか分別をもって Alla ragion deh rieda〉 (エーレナ、ウベルト、ロドリゴ)
— 三重唱の後のレチタティーヴォ〈たった一日のうちに、なんとという災難 Quante sciagure in un sol giorno〉 (アルビーナ、マルコム、セラール)
- N.10 マルコムのアリア〈ああ、死なせてくれ Ah si pera: ormai la morte〉 (アルビーナ、マルコム、セラール、合唱)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈それで、どうしたいのか? E tanto osasti?〉 (エーレナ、ジャコモ、ベルトラム、ドゥグラス)
- N.11 舞台上の小カンツォーネ [Canzoncina] 〈曙光よ! お前は昇るのか Aurora! ah sorgerai〉 (エーレナ、ジャコモ)
— 小カンツォーネの後のレチタティーヴォ〈なんと! 彼のようにだわ! Stelle! sembra egli stesso!〉 (エーレナ、ジャコモ)
- N.12 合唱〈王の命とあらば Imponga il Re〉 (合唱)
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈ああ! なんとという光景! 何て豪華な! Ah! che vedo! qual fasto!〉 (エーレナ、マルコム、ジャコモ、ベルトラム、ドゥグラス、合唱)
- N.13 エーレナの Rondò=フィナーレ〈胸の思いは満ち溢れ Tanti affetti in tal momento〉 (エーレナ、全員、合唱)

物語 (場所はスコットランドのスターリングとその周辺)

【第1幕】

スコットランドのカトリン湖のほとり。夜明け。湖に浮かぶ小舟の上で、エーレナは愛する人 [マルコム] に思

いを馳せる。エーレナが岸に下りると、狩人に扮したウベルト [実はジャコモ 5 世] が彼女を見つける。噂どおりの美人と満足したウベルトは休息の場を求め、エーレナは彼を自分の山小屋に案内する。狩人たちはウベルトがはぐれたと思い、彼を探しに山に散る。山小屋に着いたウベルトは、エーレナが反逆者ドゥグラスの娘と知って驚く (N.1 序曲と導入曲)。エーレナとロドリゴの恋を称える歌を聴いたウベルトはショックを受けるが、エーレナが他の男を愛していると知って安心する (N.2 合唱、エーレナとウベルトの二重唱)。

一同立ち去るとマルコムが登場し、エーレナへの愛を歌う (N.3 レチタティーヴォとマルコムのカヴァティーナ)。セラーノが来て軍勢の集合を告げる。ドゥグラスとエーレナの姿を見ると、マルコムは物陰に隠れて様子をうかがう。ドゥグラスはエーレナに反徒の首領ロドリゴとの結婚を強く求め、ラッパの合図で彼を迎えに行く (N.4 ドゥグラスのアリア)。姿を現したマルコムはエーレナと愛を確かめ合い、二人は結婚を誓う (N.5 エーレナとマルコムの小二重唱)。

山に囲まれた平地。高地人の戦士たちが集まり、戦地へ赴こうとしている。ロドリゴは彼らを鼓舞し、士気を高める (N.6 合唱とロドリゴのカヴァティーナ)。ドゥグラスはロドリゴを励ますが、エーレナは黙ってうつむいている。そこにマルコムが部下と共に現われ勇士として忠誠を誓うが、エーレナがロドリゴの伴侶であると聞かされる。マルコムはロドリゴが恋敵と知り、ドゥグラスは娘がマルコムを愛していることに気づく。四者それぞれの胸に怒りや苦悩がこみあげたところで、セラーノが敵軍の到着を告げる。男たちは個人的感情を押さえて戦いに臨もうと決意、吟遊詩人たちの歌う勇者を称える讃歌に送られ戦場に向かう (N.7 合唱と第 1 幕フィナーレ)。

【第 2 幕】

洞窟の見える森の中。エーレナを忘れることができず、再びウベルトに変装して現れたジャコモ 5 世が彼女への思いを歌う (N.8 ウベルトのカヴァティーナ)。エーレナと再会したウベルトは愛を告白するが、彼女は友情と考えるよう懇願する。ウベルトは誠実さの証に自分の指輪を国王からの貰い物と偽って与え、あなたやあなたの父が窮地に陥ったら王に見せなさい、そうすれば救いが与えられるだろうと告げる。折悪しくロドリゴが通りかかり、二人の様子に嫉妬する。ロドリゴはウベルトが敵側の人間と知って捕らえさせようとするが、エーレナは和解を求める。二人の恋敵は決闘すべく去り、エーレナと兵士たちも後を追う (N.9 三重唱)。

国王軍と高地人たちの激烈な戦いの中、マルコムはエーレナを連れに戻る。だが、彼女の姿が見えないので、「彼女を失った、ああ、死なせてくれ」と嘆く。そしてドゥグラスが行方不明となり、ロドリゴも打ち倒されたと兵士たちに聞かされ、残酷な運命を呪う (N.10 マルコムのアリア)。

ジャコモ 5 世の王宮の一室。囚われの身となったドゥグラスはジャコモ 5 世に許しを乞うが、拒絶される。王の指輪を持つ娘の来訪をベルランドが告げると、王は自分の身分を言わぬよう指示し、ドゥグラスを退かせる。広間に通されたエーレナは、ジャコモ 5 世の歌声 (N.11 舞台上の小カンツォーネ) を聴いてウベルトがいると知り、国王への取次ぎを頼む。扉が開くと豪華な広間があり、貴族たちが国王の勲を讃えている (N.12 合唱)。国王を探すエーレナに対し、ウベルトは自分の正体を明かす。エーレナの助命に応じてジャコモ 5 世はドゥグラスを連れて来させ、その罪を許す。続いて王はマルコムにも恩赦を与え、エーレナと結ばれることを許す。感激したエーレナは王に感謝を捧げる (N.13 エーレナのロンド=フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

1819 年 3 月 27 日ナポリのサン・カルロ劇場で《エルミオーネ》を初演したロッシーニは、その一か月後、ヴェネツィアで《エドゥアルドとクリスティーナ》を初演した (4 月 24 日。旧作《ブルグントのアデライデ》《リッチャルドとゾライデ》《エルミオーネ》から構成)。ロッシーニはサン・カルロ劇場のために年 1 作を作曲する契約を結んでおり、《エルミオーネ》に続く新作は翌 1820 年の四旬節に発表する約束を取り付けていた (バルバーイアが王立劇場総監督ノイア公爵ジョヴァンニ・カラーファに宛てた 1819 年 7 月 24 日付の書簡。そこではオラトリオの上演が予定されていた) ²。これが繰り上がったのは、オペラ作曲家ガスパーレ・スポンティーニ (Gaspere Spontini, 1774-1851) の契約不履行という不測の事態が起きたためである。

フランスに帰化して活動したスポンティーニは、1819 年 5 月にサン・カルロ劇場支配人バルバーイアとの間に同年 9 月に二つの新作を提供する契約を結んでいたが、そのかわりベルリン宮廷歌劇場のポストを得るべく運動を続けていた。彼の音楽の讃美者であるプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世が好条件を示したことから、スポンティーニはバルバーイアに新作提供が不可能になった旨を通告し、ベルリン行きを決定したのである。劇場との契約が大きな拘束力を持つ時代にあつて、こうした一方的違約は許されぬ行為であったが、プロイセン王の要請とフランス政府の仲介という圧力にはバルバーイアといえども屈するしかなかった。

《エドゥアルドとクリスティーナ》の大成功に満足したロッシーニは、最初の 3 回の上演に列席した後も 5 月

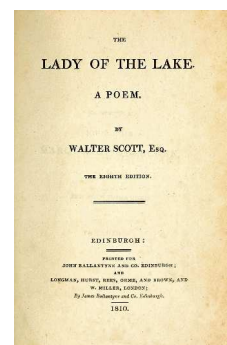
半ば過ぎまでヴェネツィアにとどまってナポリへの帰還を遅らせ、5月24日には生まれ故郷ペーザロに立ち寄った。その日彼は新設された劇場（テアトロ・ヌオーヴォ）に姿を現したが、反感を持つグループや口笛や野次を浴びせ、大騒ぎになってしまった³。幻滅したロッシーニは翌日ペーザロを去ってナポリに向かい、6月1日に到着した。同月にはサン・カルロ劇場で再演する《オテッロ》と《アルミーダ》を監督することになっていたが、ほどなくスポンティーニの問題が浮上し、バルバーイアからその穴を埋める作品を急遽求められたことは、母に宛てた手紙に「ぼくは9月のためのオペラを一つ書くでしょう」（6月11日付）⁴と記したことで判る。そして数日後の母への手紙に「ぼくはとてつもなく忙しい」と書いた（日付は6月19日と推測）⁵。

伝記作家ラディチョッティは、原作にウォルター・スコット（Walter Scott, 1771-1832）の物語詩『湖上の美人（*The Lady of the Lake*）』（1810年5月エディンバラ刊）が選ばれた経緯を、当時ローマ大賞を得てナポリに留学していた若いフランス人作曲家アレクサンドル・バットン（Alexandre Batton, 1798-1855）がこの作品をフランス語訳で読み、ロッシーニに勧めたとしている（この話はバットンの回想に基づくという）⁶。しかしながら、台本作者トットラはその台本序文に、「ウォルター・スコット氏の英語詩『湖上の美人』に基づくこの題材は、王立劇場が今年の新作オペラの一つにあらかじめ指定していたものであった」と記している⁷。王立劇場の台本詩人で先に《エジプトのモゼ》と《エルミオーネ》の台本をロッシーニのために書いたトットラは、フランス語訳を下敷きに、ケルト民族の古詩『オシアン（*Ossian [Oisean]*）』のイタリア語訳（メルキオッレ・チェザロッチェ訳で1763年に出版され、流布していた）も参照し、その詩形や韻律も取り入れて意欲的な台本を作り上げた。

ロッシーニがいつ台本を受け取って作曲に着手したか不明であるが、8月には作曲中であることが、ロドリゴのカヴァティーナの歌詞「我はお前たちと共に（*Eccomi a voi*）」で始まる手紙を母に送ったことから判る（8月31日付）⁸。しかし、当初予定された9月の初演は見送られ、10月8日付の母への手紙で初めて《湖の女》の完成を伝えた——「《湖の女》と題されたぼくのオペラを書き上げました。題材は少しロマンティックですが、効果的だと思います。神を信頼しましょう、うまくいくと」⁹。4日後の手紙でも、あらためてこう述べた——「10月に上演されるぼくのオペラを終え、これにとても満足しています」（10月12日付）¹⁰。ロッシーニは導入曲の後とマルコムのカヴァティーナに先立つレチタティーヴォ以外のレチタティーヴォの作曲を不詳の協力者に委ね、ドゥグラスのアリア（N.4）も彼に作曲させた。

初演は1819年10月24日サン・カルロ劇場にて、コルブラン、ノッツァーリ、ダヴィド、ビザローニ、ベネデッティら同劇場の主力歌手を揃えて行なわれ、第1幕フィナーレが観客を熱狂させたが、ロッシーニ自身は演奏に満足していなかったようだ。『両シチリア王国新聞（*ジオルナーレ・デル・レーニョ・デッレ・ドゥエ・シチーリエ*）』（10月25日付）の評者は作品そのものへの言及を避け、「多産なペーザロ人の最も優雅な娘たちの一人」と述べるに留まり、上演が終わると「ホールには激しい喝采が鳴り響いた：コルブラン夫人は並ぶ者なき女性歌手にふさわしい栄冠を受けるため、舞台に呼び出された。そして観客たちはロッシーニにも新たな栄誉を授けるべく、彼を招こうと一斉に叫び声を挙げた……しかし、謙虚なロッシーニはすでに姿を消していた。彼は背景幕の隅に走り去っており、栄光に満ちた運命がそこで彼を待ち受けていたのである」と記した¹¹。

ロッシーニが早々と観客の前から姿を消したのは、自分に対する批判を避けるためだったようだ。スタンダールは『ロッシーニ伝』（1824年）の第36章に《湖の女》の初演初日が大失敗してロッシーニが観客に野次られ、翌日の再演で熱狂的成功を収めたとする。そこでは初日を実際に観たかのようにスタンダールが書いているが、それは偽りで、日付も10月4日と誤記している。しかし、オペラ通からも情報を得て書かれたとおぼしきその文章に一抹の真実があると考えても間違いではなく、また「このオペラは劇的というより叙事詩的な作品」「音楽はオシアン風の色彩に染め上げられ、きわめて刺激的な野生のエネルギーがこもる」と評価している。¹²



スコットの肖像(1822年)と『湖の女』のタイトル頁

【特色】

ロッシーニ 29 作目のオペラ《湖の女》はサン・カルロ劇場のために書いた九つのオペラ・セーリアの7作目に当たり、円熟した作曲技巧が駆使されている。この作品はロマンティックな性格を備える点でも注目に値するが、その多くをウォルター・スコットの原作に負うと言っても良いだろう。登場人物は反乱軍の首領や騎士さらにヒロインのエレーナやジャコモ 5 世も含め、誰もが騎士道精神の体現者であり、正義と純粋な愛のための自己犠牲を厭わない。反乱軍とそれを受けて立つジャコモ 5 世のそれぞれが高貴な動機と行動原理を持ち、善悪の二元的対立はここには存在しない¹³。スコットランドのカトリン湖（Loch Katrine）のほとり、という舞台設定もロマンティ

シズムの発露にうってつけて、背景にある豊かな自然が作品に陰影と広がりをもたらしている（この点は、《ギョーム・テル》の先取りといえる）。

序曲（シンフォニーア）を独立させずに合唱を伴う導入曲で開始する手法は《エジプトのモゼ》（1818年）で先鞭がつけられたが、《湖の女》の場合は16小節の序奏部に続くアレグロ・ヴィヴァーチェの音楽が事実上の導入曲を形成する（ロッシーニがN.1を「序曲と導入曲」とするのは理論的には誤り）。この導入曲は非常に規模が大きく、最初に歌われるエーレナの歌〈おお、暁の光よ（*O mattutini albori*）〉がライト・モチーフ的な役割を果たし、その旋律はウベルトとの出会いの後に二人の甘いデュエットとなり（導入曲の半ば）、続くレチタティーヴォの前奏にも使われ（同、後半）、第2幕終盤（N.11）でシンボリックに回帰してウベルト（ジャコモ5世）が王宮を訪れたエーレナに自分の存在を暗示する小カンツォーネとなる。

この小カンツォーネを除くと、独唱のナンバーは第1幕にマルコム、ドゥグラス、ロドリーゴが各1曲、第2幕にウベルト、マルコム、エーレナが各1曲となる。その中で協力者の作曲したドゥグラスのアリアを除くすべてが驚くべき完成度を保っている。マルコムのカヴァティーナ〈エーレナ！君を呼ぶ！（*Elena! oh tu, che chiamo!*）（N.3）とアリア〈ああ、死なせてくれ（*Ah si pera: ormai la morte*）（N.10）はロッシーニがコントラルトのために書いた最も豊穡で技巧的な音楽で、マルコムはロッシーニがナポリで与えた最初の男装コントラルト役となっている。初演歌手ロズムンダ・ピザローニ（Rosmunda Pisaroni, 1793-1872）はこれに先立ち、《リッチャルドとゾライデ》ゾミーラ役と《エルミオーネ》アンドローマカ役を創唱してロッシーニの信頼を得ていた。続いてロッシーニは同様の男装役を《ビアンカとファッリエーロ》（1819年）と《マオメット2世》（1820年）にも適用し、最後のオペラ・セーリア《セミラーミデ》（1823年）アルサーチェ役がその声楽書法の頂点となる。

合唱と舞台上のパンダを伴うロドリーゴのカヴァティーナ〈我はお前たちと共に、我が勇者たちよ（*Eccomi a voi, miei prodi*）（N.6）ではa b ~ c”の広い音域を駆使する流麗で技巧的な歌唱が求められ、ウベルトは第2幕冒頭のカヴァティーナ〈おお、甘き炎よ（*Oh fiamma soave*）（N.8）に甘美で装飾的な歌唱を聴かせる。ウベルトの最高音d”は、続く三重唱（N.9）に二度現れる。装飾歌唱を駆使するヒロイン、エーレナのロンド=フィナーレ〈胸の思いは満ち溢れ（*Tanti affetti in tal momento*）（N.13）の素晴らしさは改めて述べるまでもないだろう。この曲はロッシーニ後期のアリア・フィナーレの精華の一つで、3ヶ月後にスカラ座で初演する《ビアンカとファッリエーロ》にも改作転用される。

第1幕フィナーレではロッシーニの壮大な構想が実現されており、ロドリーゴが吟遊詩人に歌を求め、「勝利か、さもなくば死を！」と誓うレチタティーヴォ以降の音楽はまさに見事というほかない。そして吟唱詩人の合唱〈すでに無限の輝きの先触れをなす光が（*Già un raggio forier d'immenso splendor*）〉に主要人物と新たな合唱が加わり、そのストレッタでは6人のソロ歌手と三重合唱、フルオーケストラとフル編成の二重パンダ¹⁴を投入、鮮やかな対位法でこれを処理している。惜しむべきは第三者に委ねられたドゥグラスのアリア（N.4）で、いちおうロッシーニのスタイルで書かれているものの他のナンバーに比して旧弊で音楽性に乏しく、ロッシーニが後の再演で差し替えアリアを書かなかったことが悔やまれる。



スコットランドの画家アレクサンダー・ネイスミス(Alexander Nasmyth, 1758-1840)の描いたカトリン湖の風景（年代不詳。グラスゴウのケルビングローブ美術館所蔵）

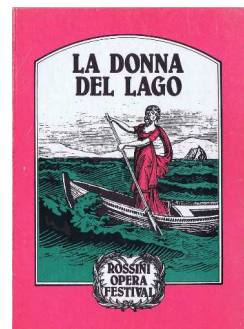


〈おお、甘き炎よ〉と〈胸の思いは満ち溢れ〉リコルディ版の楽譜ピース初版（ミラーノ、1821年。筆者所蔵）

【上演史】

1819年10月24日の初日から11月27日までの間に、《湖の女》は少なくとも7回の上演をみた（初演の正確な回数は確定しない）。サン・カルロ劇場では翌1820年2月にコルブランのための慈善公演で第1幕が上演され、次いで6月20日に本格的な再演が行なわれた。このときロッシーニはジャコモ5世を歌ったジョヴァンニ・バッティスタ・ルビーニ（Giovanni Battista Rubini, 1794-1854）のために、シェーナ〈熱愛する女！（*Donna adorata!*）〉とカヴァティーナ〈悲しげな涙に従い（*Tarrendi al mesto pianto*）〉を追加している（全集版 N.10bis. 《エルミオーネ》N.4 オレステのカヴァティーナ〈憎むべき王宮よ！（*Reggia abborrita!*）〉の転用改作¹⁵）。イタリア国内では1820年にパレルモ、1821年にヴェネツィアとミラーノ（スカラ座）、1822年にパドヴァ、ルッカ、ルーゴ、ヴェローナ、ボローニャ、トリエステと続き、20年代末までに主要都市すべてで上演されている。しかし、1835年以降はきわめて限定的で、サン・カルロ劇場でも1834年を最後にレパートリーから外れた。

国外での初上演は1821年9月29日のドレスデンを皮切りに、同年12月8日ミュンヘン、翌1822年1月2日ブダペスト、1月22日リスボン、2月11日ヴィーン（ドイツ語版）、マルタ、1823年2月18日ロンドン（ヘイマーケット劇場）、5月17日バルセロナ、7月25日ヴィーン、1824年にはサンクト・ペテルブルク（ドイツ語版）、パリ（9月7日イタリア劇場）¹⁶、9月13日グラーツ（ドイツ語版）、12月15日アムステルダム（ドイツ語版）と続いた。その他の主な上演に、ロンドン、ブルノ、リエージュ（1827年）、コペンハーゲン（1828年。デンマーク語版）、ニューヨーク（1829年。フランス語版）、ストックホルムとベルリン（1831年。スウェーデン語版とドイツ語版）、ブリュッセル（1832年。フランス語版）、メキシコ（1833年）、フィラデルフィアとダブリン（1837年）、ハバナとコルシカ島アジャクシオ（1840年）、リオ・デ・ジャネイロ（1843年）、チリのバルパライソ（1844年）がある¹⁷。けれども再演の機会そのものは乏しく、ロンドンでは1851年、パリでは1854年が最後、イタリアでは1860年トリエステのグランデ劇場が最後の上演となった。20世紀最初の上演は1958年5月9日にトゥッリオ・セラフィンの指揮で行われ（フィレンツェ五月音楽祭）、1969年5月6日にロンドン、1970年4月22日にトリノ、1974年12月11日にボローニャでも取り上げられている。しかしながら、この作品の真の復活はロッシーニ財団の批判校訂版を初使用した1981年9月16日ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでなされ、これはマウリツィオ・ボツリーニのオペラ指揮者デビューとしても注目された（演出：ガエ・アウレンティ、ジャコモ5世：フィリップ・ラングリッジ、エレーナ：レッラ・クベツリ、マルコム：マルティヌス・デュピュイ）。ロッシーニ生誕200年の1992年6～7月にはミラーノのスカラ座でも上演されている（演出：ヴェルナー・ヘルツォーク、指揮：リッカルド・ムーティ/マウリツィオ・ベニーニ）。近年の重要上演にパリのオペラ座（ガルニエ。2010年）、ミラーノのスカラ座（2011年）、ロンドンのロイヤル・オペラ（2013年）の共同制作によるプロダクションがある（指揮：ロベルト・アッパード [オペラ座とスカラ座]、ミケーレ・マリオッティ [ロイヤル・オペラ]、演出：ルイス・パスクワル [オペラ座とスカラ座]、ジョン・フルジュイムス [ロイヤル・オペラ]、ジャコモ5世：フアン・ディエゴ・フローレス、エレーナ：ジョイス・ディドナート、マルコム：ダニエラ・パルチェッローナ）。2015年2月16日にはメトロポリタン歌劇場での初上演がなされた（詳細は下記ディスク参照）。



1981年ROF上演
プログラム(筆者所蔵)

推薦ディスク

・Opera Rara ORC34 (CD3枚組。海外盤)

マウリツィオ・ベニーニ指揮スコティッシュ室内管弦楽団、エディンバラ・フェスティヴァル合唱団
エレーナ：カルメン・ジャンナッタージオ、ジャコモ5世：ケネス・ターヴァー、マルコム：パトリシア・バードン、ロドリゴ：グレゴリー・クンデ他



・Waener Erato 2564605098 (2DVD)/2564604699(BD) 2015年3月14日

メトロポリタン歌劇場上演映像

ポール・カラン演出 ミケーレ・マリオッティ指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団&同合唱団
エレーナ：ジョイス・ディドナート、ジャコモ5世：フアン・ディエゴ・フローレス、マルコム：ダニエラ・パルチェッローナ、ロドリゴ：ジョン・オズボーン他



-
- ¹ 過去の文献における初演日「9月24日」「10月4日」は誤り。
 - ² Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, I: 29 febbraio 1792-17 marzo 1822*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 1992., pp.386-388. [書簡 181]
 - ³ この事件については、フランチェスコ・カッシンがジューリオ・ペルティカーリに宛てた 1819 年 5 月 27 日付の書簡を参照されたい (Ibid., pp.374-375. [書簡 176]) 。
 - ⁴ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812-22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.239. [書簡 IIIa.130]
 - ⁵ Ibid., p.241. [書簡 IIIa.131]
 - ⁶ Giuseppe Radiciotti, *Gioachino Rossini. Vita documentata. Opere ed influenza su l'arte I*, Arti Grafiche Majella, Tivoli, 1927., p.376.
 - ⁷ 全集版《湖の女》序文, p.XXII.
 - ⁸ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa.*, p.250. [書簡 IIIa.136]
 - ⁹ Ibid., pp.254-255. [書簡 IIIa.139]
 - ¹⁰ Ibid., pp.256-257. [書簡 IIIa.140]
 - ¹¹ 全集版《湖の女》序文, p.XXIV.
 - ¹² スタンダール『ロッシェニ伝』山辺雅彦訳、みすず書房、1992 年、295 頁。
 - ¹³ 但し、反乱軍を野蛮な集団として描く演出家もいる。
 - ¹⁴ 全集版の校訂者がナポリ音楽院の筆写譜に基づいて行なった編曲の編成は、第一バンダがクラリネット 5、トランペット 9、トロンボーン 3、第二バンダがピッコロ 1、クアルティエーノ 1、クラリネット 3、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 4、トロンボーン 2、セルペントーネ 1、グラン=バッシ 1、大太鼓からなる。
 - ¹⁵ 全集版序文 p.XXVI が原曲を〈*Che sorda al mesto pianto*〉とするのは不正確で、これに先立つレチタティーヴォ〈憎むべき王宮よ! (*Reggia abborrita!*)〉とすべき (《エルミオーネ》全集版におけるオレステのカヴァティーナのインチピト)。
 - ¹⁶ 1824 年と 25 年のイタリア劇場上演ではレチタティーヴォの追加など若干の変更が印刷台本から確認でき、当時パリにいたロッシェニの関与があったと推測される。これについては全集版序文 pp.XXVII-XXX.及び Appendice III を参照されたい。
 - ¹⁷ 国外での上演記録は、Alfred Loewenberg., *Annals of Opera 1597-1940.*, John Calder, London, 1978., pp.664-665.に基づく。